「戦旗」漫画欄　昭和四年――五年

「漫画とプロレタリアート」（「プロレタリア芸術教程」第三集、昭和五年四月）「漫画と漫画家」（「アルト」昭和四年二月）

一九三〇年三月、日本プロレタリア美術家同盟第二回全国大会で鈴木賢二は書記長に、須山計一は中央委員に選出された。

一九三〇年九月、「アトリエ」プロレタリア美術の研究と批判特集に左の美校関係の執筆がでる。

プロレタリア美術概論　鈴木　賢二

世界プロレタリア美術の発生と発展　大林長男（木下幹一）

日本プロレタリア美術史　矢部　友衛

世界プロレタリア美術の現状　須山　計一

プロレタリア美術の煽動宣伝的役割について　大月　源二

一九三〇年一一月、第三回プロ展、上野公園日本美術協会で開催、「音」（矢部友衛）、「白色テロルに抗しろ」（大月源二）、「アヂ太プロ吉世界漫遊記」（須山計一）、「職場を引きあげる」（岩松淳〔樗〕）など出品さる。

一九三一年（昭和六年）二月、「新興芸術研究」（日本プロレタリア芸術の近況特集）に左記がでる。

プロレタリア美術運動の現段階　須山　計一

プロレタリア美術の新らしき形態　佐藤　敬

一九三一年一一月、第四回プロ展、上野公園、自治会館で開催、「プロレタリア青年」（大月源二）、「凱歌」（矢部友衛）、「アムステルダムの手先共」（須山計一）等出品。

一九三二年（昭和七年）春、大月源二ら検挙さる。

一九三二年（昭和七年）一一月、第五回プロ展、上野自治会館に開催。「村」「祖国のために」（須山計一）、「失業救済」（岩松淳〔樗〕）、「土木労働者胸像」他彫刻二点（佐田四郎こと入江弘）など出品。

一九三三年（昭和八年）五月、須山計一、プロレタリア美術家同盟書記長となる。一一月、須山検挙され、翌年八月起訴、徴役二年、執行猶予三年判決。

一九三四年（昭和九年）三月、日本プロレタリア美術家同盟解散。

一九三七年（昭和十一、二年頃）

西洋画科〔油画科〕三年生、杉本博、佐田勝、彫刻科同、佐藤忠良ら、学内の民主化を要求、進歩的講師をよんで研究会をおこなう。杉本は検挙され、仙台刑務所等で受刑した。なお、杉本、遠藤健郎らのデザミ展が銀座紀伊国屋画廊で三回ひらかれ、杉本は「労働者像」などかいた。

⑤　校友会の近代芸術研究部

既述のように昭和三年はプロレタリア美術運動が最高潮に達した年であるが、同年春に校友会文芸部の中に近代芸術研究部が組織され、活発な活動が始まった。同部の趣旨は、従来のような作品そのものを分析的に研究する研究法から一歩進んで芸術を気候風土、民族性、国民性、社会との関連の上で把え、科学的かつ総合的に研究を進め、芸術の依って立つ基礎をつきとめようという点にあった（岡田秀雄「近代芸術研究部」『東京美術学校校友会月報』第二十七巻第三号）。首脳部は岡田秀雄、木下幹一、木村郁太郎、小松益喜、佐藤

敬、寺田精太郎らで、彼らは図書部、演劇部、映画研究部、エスペラント部のメンバーと緊密に連絡をとりながら活動し、昭和四年二月には校友会月報と異なり、全く自主的な雑誌であるところの『美術研究』(433頁参照)を創刊した。

『美術研究』ははじめ図書部、演劇部および近代芸術研究部の機関誌として発行され、追って映画部とエスペラント部が加入した。近代芸術研究部はその中心的役割を果たしたが、外にどのような活動をしていたかというと、次のような興味深い資料がある。

「寄稿」東美の近代芸術研究部に就いて

東京美術学校近芸部、寺　田

まへおき

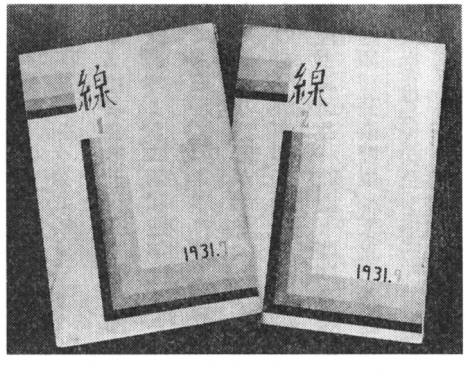
今度太平洋美術学校で近代芸術研究会の人々が中心になつて雑誌を出す事になつた。それに就いて此の或る同人が私に援助して呉れないか？　と云はれた勿論、私は引き受けた。何んの力を持つてゐない私でも此の雑誌を発展さしたいと云ふ熱意を持つてゐたからであつた。

『美術研究』表紙

其処で先づ同人の注文通りに東美の近代芸術研究部に就いて書く事にした。

×　×　×

近代芸術研究部はどんな歴史を持つてゐるか？　そしてどんな仕事を今迄にして来たか？　に就いて私は餘りよくは知らない。で此処では近芸（近代芸術研究部）が何故吾々に必要となつて、生れて来たか？　又はどんな組織形態でどんな目的を持つてゐるのか？　そして次に此処二三年にどんな仕事をして来たか？　等の四つの事項に亘つて簡単に述べ度い。



『線』表紙　（山口泰二氏提供）

吾々は此のアカデミックの学校に来ても近代より現代に至る新らしい芸術に就いては絶体[ママ]に研究し又は理解する事が出来ないのである。吾々は若い人間である。その為、吾々は長い未来と大きい希望とを持ち、そして新らしき美術史の第一頁をかざる責任を持つてゐる。

其処で吾々は学校の命ずるがまゝの研究では物足りなくて此処に新らしき芸術を研究する近代芸術研究部が生れたのである。

次に其の目的を述べれば、近芸の目的は其の名の示す通り、近代の美術を中心とした芸術の研究を目的としてゐる。

例へば近頃流行してゐるシュール・レアリズムが段々と美術界に進出して色々の展覧会に其の絵が出て来る。するとそれを直ちに近芸で取上げてシュール・レアリズムの研究会を開く。そして盛んに其の席上で皆が思ひ〳〵の意見を出して討論をやる。又帝展や二科やプロレタリア美術展覧会等々が開催されるとそれの批判会を持つ。又次に適当な講師をよんで講演会をやる、又はマツペ（画集）等を配布する等である。以上に述べたのが大体の目的である。では次に近芸の組織形態はどうなつてゐるかに就いて次に述べてみよう。

各クラスは各科に一人の代表者が居て此の人達に依つて代表者会議が持たれる。此の会議は勿論各クラスは各科の人達の希望や意見を述べて大体の学生一般の希望意見をまとめそして活動方針を決定するのである。此の決定された事を実際に実行に移す為に委員会がある。此の委員会には六人の役員が居る、そして此の委員会にはその補助機関として、企劃部、宣傳部、組織部の三つの部門が置かれ、その独自の活動をやつて行く。是が大体の組織形態である。

最後に此処二三年にやられた仕事に就いて簡単に述べてみよう。先づ講演会としては秋田雨雀氏の「ソヴェート、ロシアの文学に就いて」の講演を始めとして津田青楓氏、里見勝蔵氏、村山知義氏、横川三果氏等々の講演がやられ、どの講演会も非常な成績で終つたものである。此の講演会はすべて講師の講演の後茶話会が持たれて講師を中心に色々の質問、意見等がなされた。

次は研究会の事であるが研究会はフリーチエの「芸術社会学」の研究に、時々の展覧会の批判会及びマツペの批判会等が持たれた。此の研究会で特に盛会であつたのは去年のプロ展批判会であつて、此の時は可成の多くの者が会場に一緒に總見し其の後、早大生との合流に依つて盛大な批判会が持たれた。

次にマツペの発行と其の配布であるが、此は最近企てられたもので今は未だ第一輯（八枚）しか発行されてゐない。其の内容は、ケーテ・コルウィッツ、オットー・ディックス、ジョンソン、カーツマン、オスメリキン、リベラ等々の作品である。今第二輯が準備されつゝある。此の第二輯の編輯は第一輯のそれと多少変更して、西洋画の外に日本画、建築、ポスター、漫画、舞台装置等々を可成に入れる事にした。其の枚数は二十枚餘りである。

次に展覧会の事であるが是は餘りなされず、唯一度、洋書の装訂（ママ）展が開かれた程である。（以上）

（『線』創刊号。昭和六年七月）

右の執筆者寺田は寺田精太郎（当時本校西洋画科四年生）と考えられる。寺田は『美術研究』最終号（昭和五年四月）に痛烈な卒展批判を執筆した人で、彼が『線』に寄稿したのは、本誌（松本禎子氏所蔵）に書き込まれた薗田猛のメモによれば、薗田がプロレタリア美術運動の横の連絡組織を作ろうとして寄稿を依頼したためだったことがわかる。

この資料が興味深いのは、近代芸術研究部の活動内容が明記されていると共に、寄稿自体が薗田の「〔昭和六年〕太平洋画学校内に松本俊介らと東京美校内の活動にならって、大〔太〕平洋近代美〔芸〕術研究会

を作り、同人雑誌「線」を発刊」（『プロレタリア美術史』岡本唐貴・松山文雄編著。一九七二年九月重版、造形社）という発言を裏付けるものであって、相互の影響関係が把握できるからである。『線』は松本竣介らの作家活動において重要な意味を持つものであり、内容については山口泰二著「松本竣介とプロレタリア美術運動――新発見の『線』創刊号を中心に――」（『美術運動』第一二〇号、一九八九年二月）などの研究があるので敢えて再言を要しないが、彼らの活動が本校の近代芸術研究部のそれと一脈つながるものであったことは、これまでの研究では見落されていたことであった。

⑥ 女子生徒（ラギー・ゾルフ）

昭和三年三月、ドイツ大使ゾルフの娘ラギーが一時入学した。年報の「将来施設上重要ト認ムル件」に記されているとおり、本校はたび重なる女子部設置要求にも拘らず認可が得られず、女生徒に門を閉ざしていた。ただし、明治期においてジョセフィン・ハイド、マリー・イーストレーキ、ハイエット・デリンジャー等の欧米人女性を特別に受け入れており、今回もその例に倣ったものである。当時の教務関係書類に

通知〔昭和三年一月十日立案〕

独乙大使令嬢　ゾルフ・ランコ

右西洋画実習見学ノ為当分之間長原教授担当ノ西洋画科第一年級教室ニ出入許可相成候ニ付右御含置相成度候也　教務掛

各掛御中

と記録があり、「ランコ」はラギーの日本名と考えられる。

ラギーの入学は新聞に格好の話題を提供し、本校校門をバックにした彼女の写真が数紙の紙面を飾った。同月十八日の『東京日日新聞』は次のように報じている。

美術學校に咲く異國の花一輪

ドイツ大使の令嬢が繪の研究に

この十一日から女禁制の上野の美術學校に毎日姿を現す上品なドイツ美人　見るからにけだかく勿論モデル女ではない、荒くれの學生連中も一目おいてゐる始末

この美人こそ駐日ドイツ大使ゾルフ氏の令嬢、歌舞伎通として知られるラギー（一九）さん

嬢は大の日本趣味、數年前から日本畫の研究を續けてる外藤間政彌氏について舞踊も研究、過ぐる年の夜會の時に奴〔ママ〕道成寺で喝采を博したこともある

來朝以來八年、日本趣味も大體つくし故國で習得するひまのなかった西洋畫を思ひたち、見學生といふ名目ではあるが美校の長原孝太郎氏の下で專心研究することとなつた

大使も元來女性の入れない學校に特に入れて貰つたことを深く感謝している。

ラギーは同年十月のゾルフ大使帰国と同道したことが考えられる